

[成果情報]アユの小型早期放流に適した新規種苗系統の作出

[要約] 本栖湖産系と鶴田ダム湖産系アユの交配により作出した新規系統種苗は、鶴田ダム湖産系に比べて解禁初期に釣られやすいが、冷水病に弱い。成熟の時期は同程度である。

[担当] 山梨県水産技術センター・増殖スタッフ・芦澤晃彦

[分類] 技術・普及

[課題の要請元] 山梨県漁業協同組合連合会

[背景・ねらい]

近年、冷水病被害やカワウによる食害、河川環境の悪化などによりアユ漁場での不漁がみられる。そのため、遊漁料収入の減少に伴い放流量が減少し、更に収入が減少するという悪循環の状況となっている。少しでも状況を改善するため、アユ放流漁協からはより良い種苗の供給が求められている。そこで、種苗特性の改良を目的として本栖湖産アユを交配した種苗の特性を把握する。

[成果の内容・特徴]

1. 鶴田ダム湖産系（以下、ダム湖産系）及びこの系統のメスに本栖湖産アユのオスを交配した新規系統（以下、ダム本栖湖産系）を河川に放流し（表 1）、友釣りによる釣果を比較した。
2. 解禁初期の冷水病発生確認前はダム本栖湖産系が有意に釣られやすく（G 検定、 $p=0.011$ ）、冷水病発生確認後はダム湖産系が有意に釣られやすくなる（G 検定、 $p<0.01$ ）。冷水病終息後の釣られやすさは同程度となる（表 2）。
3. 6月の釣獲魚の大きさに差は無い（U 検定、 $p>0.05$ ）。
4. 冷水病感染試験の結果、ダム本栖湖産系はダム湖産系に比べて冷水病に弱い傾向にある（G 検定、 $p=0.065$ ）（図 1）。
5. 雌の成熟の進行具合は両系統とも同程度であり、漁期の長さは同等である（図 2）。

[成果の活用上の留意点]

1. 河川環境が良好であることなど、放流後の定着が期待できる適切な場所へ放流することが重要である。
2. 系統毎に長所・短所があるため、それぞれの種苗特性を考慮した放流が必要である。

[期待される効果]

1. 従来から当所で保有している系統よりも解禁初期に釣られやすく、解禁用の新たな種苗系統として活用できる。
2. 各系統を組み合わせることで、解禁初期から後期にわたり高釣果が期待できる。

[具体的データ]

表 1 放流データ

	ダム本栖湖産系	ダム湖産系
放流日	5月20日	5月20日
平均体重(g)	8.6	8.2
放流量(kg)	64.40	60.66
放流数(尾)	7,488(50.3%)	7,398(49.7%)

表 2 期間別の友釣りでの捕獲尾数

	ダム本栖湖産系	ダム湖産系
冷水病発生確認前(6/15~7/12)	84(59.2%)	58(40.8%)
冷水病発生確認期間(7/13~8/30)	75(28.4%)	189(71.6%)
冷水病終息後(8/31~9/13)	42(48.8%)	44(51.2%)

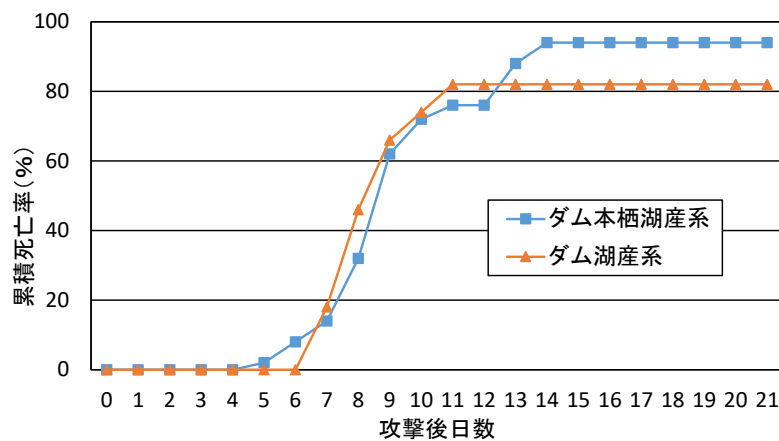


図 1 冷水病感染試験における累積死亡率

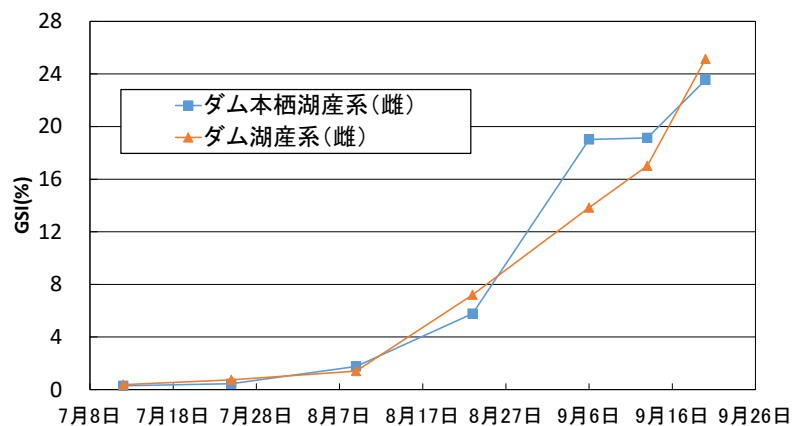


図 2 GSI の変化

[その他]

研究課題名：アユの小型早期放流の実証試験

予算区分：県単

研究期間：2022 年度～2023 年度

研究担当者：芦澤晃彦、藤原亮、三浦正之